



はくぶつかんへ
行こう

ひこねじょうはくぶつかん
彦根城博物館

彦根城博物館



◆ちょっとかわった博物館◆

彦根城博物館は、外から見ると時代劇のお屋敷に似ています。実はこの博物館は、江戸時代の「表御殿」にそっくりなのです。表御殿は、殿様(藩主)や家来(家臣)たちが仕事をするところでした。家来は夕方になると自分の家へ帰りましたが、殿様はここで暮らしていました。表御殿は、役所のようでもあり、また殿様の家でもあったのです。

表御殿は今から130年ほど前にこわされてしまいましたが、20年ほど前、今度は博物館として、外側をむかしの通りにして建てられました。



表御殿の広間で、きっちり並んだ家来と殿様が会うことも、大事な仕事の1つでした

◆殿様の部屋と庭園◆

博物館には、殿様が住んでいた部屋が、畳や障子、土の壁など、江戸時代と少しも変わらない様子で建てなおしてあります。ここで殿様は、庭をながめてくつろいだり、「茶の湯」を楽しんだり、寝たりしました。

殿様の部屋に面した庭園も、むかしの姿にもどされています。発掘してわかった庭園の跡や、江戸時代にかけられた絵図を見ながら、池を掘り、松やソテツなどの木を植えました。



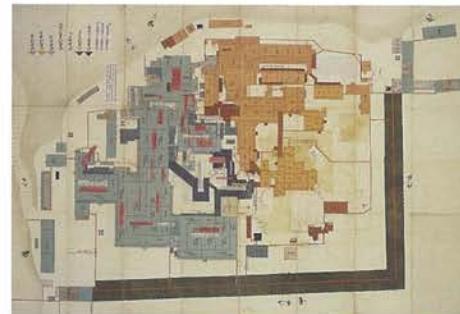
殿様の部屋から見える庭



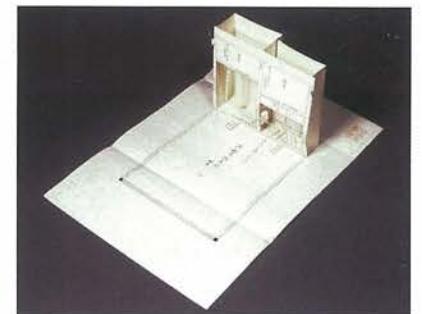
江戸時代の庭の様子をえがいた絵図

!どうしてむかしの姿がわかったのでしょうか!

表御殿はこわされました、発掘してわかった建物の跡は、江戸時代の表御殿の図ともぴったり合っていたので、むかしどおりの場所に建物を建てることができました。また、「起こし絵」という立体的な絵図が残されていた部屋は、柱の太さや壁の種類までそっくりにすることができました。



むかしの表御殿の図
建物の形や部屋の場所がわかります



「起こし絵」
紙を組み立てた立体模型です

◆能舞台◆

能舞台は、「舞台」に「橋がかり」という長い廊下がついた、能を演じるための建物です。正面の奥の板には大きく松が、右脇には若竹の絵がかかれています。この能舞台はおよそ200年前に建てられたものです。表御殿がこわされた時に他の場所にそのまま移されました。博物館を建てる時に元の場所に戻されました。床の下には大きな穴が掘ってあり、「しっくい」(コンクリートのようなもの)で塗りかためられています。これは、床をトンと足で踏んだ音が、よくひびくようにするための工夫です。



能舞台 博物館の中庭にあります



発掘して出てきた能舞台の床下

彦根のむかし



ひこ ねじょう

はくぶつかん ひこ ねじょうない いちばんたか ぱしょ こくほう でんしゅ
博物館のある彦根城内の一一番高い場所には、国宝の天守が
たたか 建っています。戦いにそなえて、天守を中心にいくつもの櫓
ぶき たてもの さんじゅう ほり
(みはりをし、武器をしまっておく建物)を建て、三重に堀をめぐら
せて、敵が入ってくるのを防ぐ工夫がされています。しかし、彦根城が建てられてからは平和な時代が続いたので、実際には戦いの場とはならず、城はシンボルとして大切にされました。

えどじだい いま ねん まえ
彦根城は江戸時代のはじめ、今から400年ほど前に建て
られました。城と城下町をつくるのに、およそ20年かかり
ました。彦根の町はむかしとは大きく変わってしまいまし
たが、天守はずっと同じ姿で400年を過ごしてきたのです。



国宝彦根城天守

ひこねじょうえず ！むかしの彦根城の絵図！

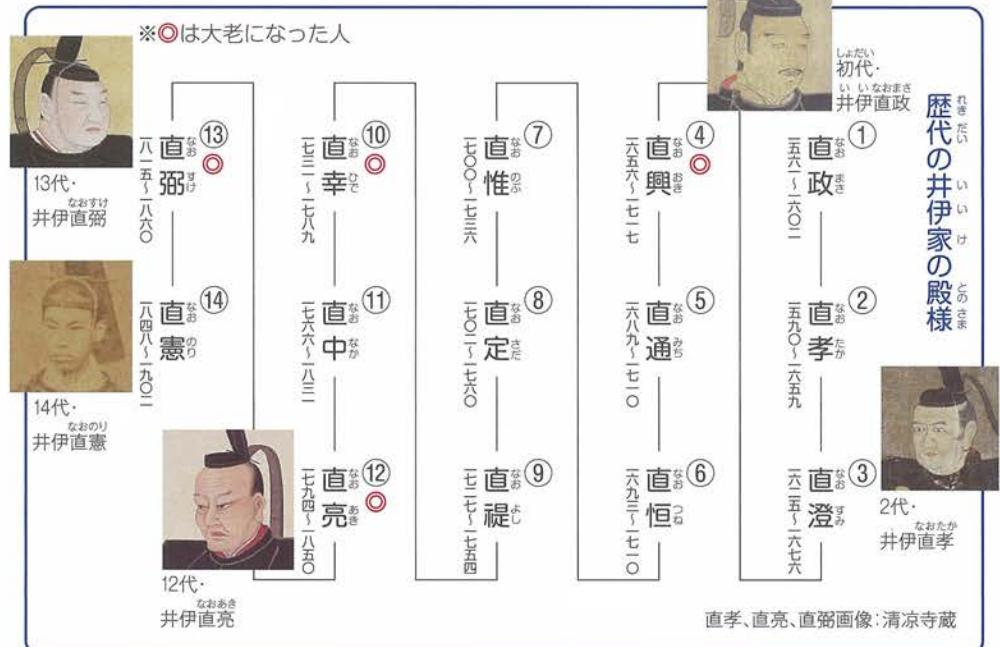


◆彦根の殿様・井伊家◆

むかしの彦根の領地は今の彦根市より大きく、滋賀県の東部から北部に広がっていました。そこを治めていたのが、井伊家です。江戸時代のおよそ260年の間に、井伊家の殿様は14人いました。

江戸時代の彦根藩の領地
たが、反対の立場の人た
た。直弼の子の直憲が、

博物館には、美術工芸品や古文書などが、およそ6万5千点あります。その多くは、井伊家に伝わったもので、井伊家から彦根市に寄付されました。彦根市民みんなの宝物となったのです。



戦いの道具



◆戦いのための道具◆

日本では、むかしから大小さまざまな戦いがくり返されてきました。戦いでは、敵を攻撃するために刀、槍、弓矢、鉄砲などを使い、体を守るために鎧や兜を身につけました。また馬に鞍や鎧をつけて乗り、戦いに参加する人もいました。平和な時代になっても、武士の家では戦いに備えて刀や鎧兜を用意し、武士のシンボルとして大切にしました。

◆ホンモノの刀◆

展示している刀はすべてホンモノです。千年くらい前に作られた古い刀もありますが、どの刀も新しいもののようにキラキラしています。刀が作られた一番の目的は、敵を攻撃することです。博物館にある刀も実際に使われたかもしれません。しかし、刀が大切にされてきた理由はそれだけではなく、美しさも必要とされました。美しさを保つためには、錆びないように手入れをしなければなりません。長い間、たくさんの人たちによって手入れをされてきた刀が、今も美しく輝いています。

!注目してみて!【太刀と刀】

「太刀」は刃を下にして腰に下げ、「刀」は刃を上にして帯に差します。古い時代には太刀が用いられていましたが、戦い方が変わってきたことによって、刀が使われるようになりました。展示室では、太刀は刃を下にして、刀は刃を上にして飾っています。太刀と刀を見分けられるかな?



鎌倉時代の武士



江戸時代の武士

◆赤色のよろい◆

井伊家には殿様から家来まで、赤い色の鎧や兜をつけるという決まりがありました。戦いのときに目じるしとして使った旗も赤色です。兜の金色の角は「天衝」と呼びます。殿様の兜には頭の横に、家来の兜には頭の前に、天衝をつけることも決められていました。

戦いがあったころは鉄で鎧を作っていましたが、平和な時代になると、鉄の代わりに硬くした牛の革を使って軽い鎧を作ったり、鎧がりっぱに見えるような飾りをつけたりしています。博物館には、実際の戦いで身を守るために鎧もありますが、殿様が儀式などで着たり、飾ったりするための鎧も多く残されています。



なおたか
2代 直孝の鎧兜

!注目してみて!【武士のおしゃれ】

●変わり兜●

大勢で戦う戦場はいつも死と背中あわせでした。戦場で活躍し、めだつために、武士はさまざまな形の兜をかぶりました。動物やくだものなど、いろいろなデザインのものが作られています。



うさぎの耳の形をした兜

●変わり塗鞘●

刀をそのまま持つのは危険です。そのため刀を入れる鞘があります。鞘には儀式用の黒色のものと、持ち主の好みによって作られたものがあります。好みによる鞘には、変わった模様を入れるなど、豪華で派手なものが多く作られました。



奥深い能の世界



◆能ってなに◆

能は今から650年くらい前にはじめられ、さかんにおこなわれた劇です。専用の能舞台の上で演じられます。役者は顔に能面をつけ、能装束を着て演じます。鼓や笛の音にあわせて、せりふと歌がいつしょになった「謡」を歌いながら、決まった形の演技をし、舞をまいります。能と一緒に、笑いを中心とする狂言もおこなわれました。

◆能面◆

能は仮面を使う劇です。物語の役によって、いろいろな種類の能面が必要となります。種類は、ぜんぶで250くらいあるといわれていますが、実際によく使われるものは60~70種類です。木を彫って作り、色をつけています。目や歯に金具をはめたものや、ひげを植えつけたものもあります。神の面、老人の面、強い力をもつ鬼の面、幽霊の面、男や女の面があります。

！注目してみて！【能面の表情】



展示室で見る能面は、無表情だという印象を受けます。ところが、舞台で実際演じられるときの能面を見ていると、見る角度や光のかげん、そして役者の動きなどによって、1つの面でありながら、喜んだり、怒ったり、悲しんだり、楽しんだりと、豊かな表情を感じることができます。

展示室でもいろんな角度から見てみよう。

若い女の面「小面」



能装束
金色の糸を織りこんでいます

◆能装束◆

能装束の中には、ずいぶん袖が長いものや、色が華やかなものがあります。能装束は、むかしの人が普段着ていた着物とは違い、舞台で使うための衣装なのです。

役によって使う装束の種類は決められています。文様や色のトーンを選んで使い分け、着ているもので演じる役の性格をあらわすことができます。多くは絹で、糸を織って文様をあらわしますが、麻の布に色を染めて文様をあらわすものもあります。

◆大名家の能道具◆

江戸時代の大名は、屋敷に能舞台を建て、能役者をやとい、能面や能装束を集めました。井伊家でも能道具が集められましたが、大正時代の関東大震災(1923年)でほとんど失われてしまいました。

博物館にある能の道具は、おもに井伊家の当主、直忠(最後の殿様・直憲の子)が集めたものです。直忠は他の大名家に伝わったものを買ったり、新しく作らせたりと、たくさん種類をそろえました。



おもてごてん 表御殿の能舞台(大正時代)

直忠もここで能を演じました

！注目してみて！【能装束の文様】

能装束には、たくさんの種類の文様があります。女の役に使うのは、四季の草花やありふれた品物などの、やさしい日本の文様です。男の役には、龍や雲などの、力強い中国の文様を使います。日本の伝統的な色である、紅、緑、青、白、黒、茶、そして金や銀が用いられ、色の組合せにも工夫があります。



日本の文様
中国の文様

茶の湯



◆お茶の種類◆

みなさんが毎日飲んでいるのは、お茶の葉にお湯をそそいで飲む「煎茶」です。これとは別に、お茶の葉を石臼でひいて、細かい粉にしたお茶を「抹茶」といい、お湯にとかして飲みます。

抹茶は中国から日本へ伝えられました。最初はお寺のお坊さんが薬として飲んでいましたが、しだいに一般の人たちにも広まってきました。



!注目してみて！【茶の湯の道具】



風炉を使う時のお茶の道具組

- ①風炉・釜:お湯をわかす道具
- ②水指:水をいれる道具
- ③茶碗:お茶を飲む器
- ④茶筅:抹茶とお湯をまぜる道具
- ⑤茶筒:抹茶をいれる器
- ⑥茶杓:抹茶をすくう道具
- ⑦建水:すしいだ水を捨てる器

抹茶をお湯にとかすことを、茶の湯では「点てる」といいます。上の写真は、実際にお茶を点てるために道具をセットしていますが、展示室ではバラバラに並べられています。

どれがどの道具か、わかるかな？



炉を使ったお茶席

◆中国へのあこがれ◆

日本はむかしから中国をお手本にしていました。中国からいろいろな新しいものが紹介されると、それを自分たちの生活に合うように工夫して、日本独自の文化を作りだしてきました。中国からもたらされたお茶も、飲み方が研究されて、「茶の湯」という文化にまで発展しました。お茶を点てるための特別な道具や、お茶を飲む動作など、いろいろな決まりごとが作られ、現在まで伝えられています。

お茶の文化の中では、今でも中国へのあこがれがとても強く残っているので、茶の湯の道具も、中国で作られたものが最高であるとして大切にされています。

◆もてなしの心◆

花に飾られた花生
季節の花をバランスよく飾ります

茶の湯では、お茶を味わうと同時に、使われている茶碗などの道具や、部屋に飾られている花や掛け軸を見て楽しめます。お客様をむかえる主人は、季節や客の好みを考えて、心をこめたおもてなしを用意します。客となる人もまた、心をこめておもてなしを受けなければいけません。茶の湯で一番大切なのは、もてなしの心なのです。



季節を感じさせる和菓子
目で美しさも楽しめます

!注目してみて！【茶室・天光室】

茶の湯のもてなしに使う部屋には、ひざがぶつかるほどの小さな部屋があります。客と主人は、ここで静かにお茶を飲みながら、心と心の会話を楽しめます。

みなさんの部屋と比べてみると、天井が低く、ずいぶん小さい部屋ですが、お客様をもてなすためにとても丁寧に作られています。



天光室
博物館木造棟にあります

むかしの日本の楽器・雅楽器



◆雅楽ってなに?◆

日本の中古樂は、今から1200年くらい前に中国などから伝わってきた音楽と、日本に古くからあった音楽とを、まとめたよ呼び名です。雅樂には、楽器の合奏と舞、そして歌があります。今ではあまり耳にすることはできませんが、むかしの人々は、私たちがコンサートやCDで音楽を聞くように、雅樂を楽しんでいました。

博物館にある楽器は、おもに12代の殿様・直亮が集めたものです。種類も多く、しかも古い時代に作られた楽器がふくまれているので、日本を代表するコレクションといわれています。



雅樂の合奏



弾く楽器・琵琶
鎌倉時代に作されました

!注目してみて!【楽器を入れる袋や箱】

楽器は、音をだして演奏する「道具」ですが、古いものや、音のよいものは、とても大切にされました。「銘」という特別の名前をつけることもあります。楽器をしまっておくために、高価な布を使った袋や、漆を塗ったりっぱな箱が作られました。楽器だけではなく、入れ物にも注目してみよう。



笛を家(入れ物)におさめ、袋にいれて箱にします

大名の暮らしの道具



◆暮らしの道具・調度◆

みなさん、毎日、いろいろな道具にかこまれて生活しています。筆ばかり・椅子・机・そして冷蔵庫・洗濯機など。むかしの人たちも、たくさんの道具を使って生活していましたが、道具には使いやすさとともに美しさも求められました。そうしたむかしの道具を「調度」といいます。博物館にある調度は、殿様やその家族が使っていたもので、きれいで豪華な調度がそろえられています。

!注目してみて!【お姫様の洗面道具】

博物館には、最後の殿様・直憲と結婚した、禧宮宜子が使った調度が残されています。道具を見て、お姫様の朝の一場面を想像しよう。

- ①鏡と鏡立
- ②鏡をしまう箱
- ③たらい



宣子の洗面道具

- ④湯桶
- ⑤手拭掛



宜子のお化粧道具

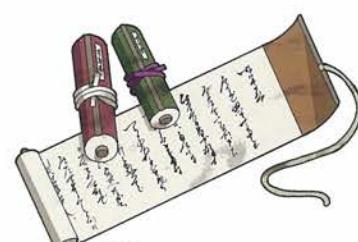
かい が しょ 絵画と書

◆絵画と書のかたち◆

みなさんが目にする絵や書は額に入れて飾られています。額はおもに西洋で発達したものです。むかしの日本の絵や書は、これとは違う形でした。たためるようにできている「屏風」、横長の巻物である「巻子」、上からつるす「掛軸」など、どれもコンパクトにして収納できるようになります。



屏風



巻子



掛軸

◆四季を楽しむ◆

日本人はむかしから、春・夏・秋・冬という季節のうつりかわりを大切にしてきました。四季おりおりの自然を楽しみつつ、春には梅や桜の絵を、秋には紅葉や菊の絵を見て楽しみました。また、季節の中で感じたことを和歌という歌にして、きれいな文字で書くという楽しみ方も、長い間さかんにおこなわれています。

！注目してみて！【屏風は道具？】

屏風は、絵や字の美しさを見て楽しむだけのものではありません。風を防いだり、広い部屋を2つに分けたりと、べんりな「道具」としても使われていました。



屏風を使って部屋を分けています

き ろく こ もんじよ むかしの記録・古文書

◆「古文書」でむかしが見えてくる◆

むかしに書かれた手紙や記録を「古文書」といいます。今とは少し違う形の字で書かれているので、読みにくいですが、ここに書かれていることを読みとくと、むかしのできごとや人々の暮らしがわかります。博物館には、約6万点という、きの遠くなるような数の古文書があります。みなさんの手紙やノートも、何百年もすると「古文書」と呼ばれて、大切にされるかもしれません。

！注目してみて！【何が書いてあるのかな】

江戸幕府の命令によって、彦根城をつくる工事がはじめました。これは、2代将軍・徳川秀忠が工事の進みぐあいをたずねるために彦根に出した手紙です。



彦根の殿様の命令で作られた、家来それぞれの家の歴史をまとめた帳面です。

やくそく

はくぶつかんには、みなさんのはかにも、

ひと けんがく

たくさん的人が見学しています。

つぎのこととをまもりましょう。

はじ

◆走らない

おお こえ はな

◆大きな声で話さない

ひと

◆ほかの人のめいわくにならない

学校

年

氏名

展示解説書「はくぶつかんへ行こう」

2010年3月発行

編集・発行 彦根城博物館 滋賀県彦根市金龟町1番1号 電話0749(22)6100

印刷 近江印刷株式会社

作画 横朝兆

この印刷物は外注により作成しています(2000部作成)印刷単価48円(1円未満切捨)。